



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾 15

次世代型薬剤師と「謎解き能力」

ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

薬学教育6年制で到来する 「次世代型薬剤師」への移行

薬学教育6年制は、次世代型薬剤師の到来を意味するはず。そして、法律上は既存の4年制教育を受けた薬剤師と、今後6年制教育を受けて輩出されてくる薬剤師を区別しないことになっていますから、今までの薬剤師さんも次世代型薬剤師へと移行していくことになります。

では、次世代型薬剤師とは何でしょうか？ 血圧や脈拍などのバイタルサインを自分で測定できる薬剤師が次世代型でしょうか？ 聴診器を使える薬剤師が次世代型でしょうか？ はたまた、医師との間で作成合意されたプロトコールに基づいて処方の変更などを行う薬剤師が次世代型でしょうか？

私は、いずれも違うと思います。何を持って次世代型とするか。私は、患者さんの状態が理解できているか否かではないかと思っています。フィジカルアセスメントと業界では言い習わしてきた言葉ですが、私はあえて「謎解き能力」だと思っています。

医師の「謎解き」のもととは診断学 薬剤師にとっての「謎解き」とは？

日常診療を行っているとき、いろいろな患者さんの状態変化に出くわします。たとえば血圧が下がったり、脈拍が上がったり、足がむくんだり、眩暈や吐き気がしたり、と。私たち医師は、それらを基本的には病状の変化や新しい症状の出現としてとらえます。そのために診察やさまざまな検査を行って診断します。これも、いわば「謎解き」になります。

医師の「謎解き」のもとになっているのは、診断学

です。この「謎解き」能力の差が、医師の実力のかなりの部分を占めるといえますし、これは患者さんが受ける治療の質を左右するので、その向上のために生涯研修にも励むわけです。また、医師としての経験年数が一番効いてくるのも、この「謎解き」能力だといえます。

同様に、次世代型薬剤師に求められているのは、先ほどのような患者さんの状態変化について「謎解き」をしていくことだと思います。ただ、医師と同じように、症候からさまざまな検査も活用して病名を考えていく診断学に基づく「謎解き」をするものではありません。薬剤師ならではの知識、特に、薬理学や薬物動態学、製剤学の知識を駆使して患者さんの状態変化の「謎解き」をしていくことが求められていると思います。

なぜ、足がむくむのか、血圧や脈が変動するのか、眩暈や吐き気がするのかということ、医薬品の影響（作用や副作用、相互作用等も含めて）の観点から、きれいに「謎解き」をしていくことが重要だということです。

薬剤師としてのキャリアが積み重なれば「謎解き」の質は良くなっていくでしょうし、薬剤師が取り組む生涯研修の方向性も、より明瞭に見えてくるのではないのでしょうか？

共同薬物治療管理（CDTM）を行っていくためには、医師と患者さんの治療についてきちんと話し合えなくてはなりません。

そのためには、患者さんが一体どういう状態にあるのかを理解すること（＝謎解き）が必要であり、そのためのツールとしてバイタルサインがあるという流れを、ぜひご理解いただきたいと思います。